

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520833

研究課題名(和文)日本の高齢社会における老いと看取りをめぐる苦悩とケアの医療人類学的研究

研究課題名(英文) Medical Anthropological Studies of Suffering and Care in Aging and Dying in the Aging Society of Japan

研究代表者

浮ヶ谷 幸代(Ukigaya, Sachiyo)

相模女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40550835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：日本の高齢社会で老い、看取り、死の構築は二極化していることが明らかになった。一つは、老いと死は待つべきプロセスというよりは自分でデザインする“終活”であることが広く認識されるようになった。家族葬や自然葬を選択できる社会では、「自分らしい死」が目指されるが、それが個人化に拍車をかけている。主体的な選択は伝統的な束縛からの解放になるが、反面、迷いや葛藤、苦悩を生み出すことにもなる。二つ目は、東日本大震災を契機に伝統的な葬儀や家族や地域のつながりが再評価され、在宅医療を可能にするケアのあり方が模索されている。しかし、看取り文化を失った多くの人にとって在宅での看取りは不安を抱かせている。

研究成果の概要(英文)：I cleared that the construction of the way of aging and dying is to be bipolarized in the aging society of Japan. One is that the people have appreciated that they should design the way of aging and dying by themselves rather than to leave natural life course. They have been able to choose a natural burial or a family one, and to choose one among options has further accelerated individualization by 'Jibunrashii Shinikata' that means one's characteristic way of dying. Though the active choice is to be free from the traditional restrictions, the people are to have bewilderment, entanglement or suffering. The other, the people have reevaluated the traditional funerals and the ties among family members and communities taking the opportunity of the Great East Earthquake and Tsunami, various medical experts have searched for the way of support as a home care. However, the people have held much anxiety for dying at home because of losing culture of attending one's deathbed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：ケア 苦悩 医療人類学 老い 看取り 死 フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 病院医療から在宅医療へ

日本が高齢者社会そして多死社会を迎えるに当たり、厚労省は国民医療費の高騰を抑えるために、病院医療から在宅医療へとシフトすることを発表した。しかし、これまで臓器移植や生殖医療、再生医療などの第三次医療を重視してきたため、第一次のプライマリヘルスケアが人々のニーズとして問題化されることはなかった。また高度な専門分化を目指してきたため、地域医療を担う町医者のような総合診療医を育てる教育環境も手薄であった。こうした中での在宅医療へのシフトは、さまざまな問題を抱えている。

(2) 医療専門家のケアのあり方

在宅医療へとシフトしていく中で、問われるのは様々な職種のあいだでの連携のあり方である。生活の場が医療提供の場となる在宅医療では、患者の全体的生を支えるためには多種多様な役割を持つ専門家が必要となっている。ところが、専門分化を目指す専門教育では、他職種との差別化は問題にされても連携の仕方は問題にされてこなかった。しかし、生活の場では治療というより暮らしを支えるケアが要請される。これからの専門家は他職種との連携だけでなく、生活の場を支えるケアのあり方を考えなければならない。

(3) 苦悩とケアの研究

医療人類学では、これまで病気になった人の経験と専門家がとらえる疾病との違いを指摘してきた。そして、病気をめぐるサファリングの経験は人間にとって普遍的な生の根源的な様式を形作ること、それは専門家の診断基準である疾病とは価値が異なることを主張してきた。他方で、人類学では対象社会における生老病死をめぐり人々の営みを観察する際に、ケアに相当するような配慮や世話、面倒を見ることなどの行為が地域固有のやり方で慣習化されている様子を記述してきた。しかし、今や生物医療は世界各地に普

及している。当然、医療専門家が各地に誕生している。そこで、苦悩とケアとを結びつける研究が要請されたのである。

2. 研究の目的

(1) 老い、看取り、死をめぐり苦悩とケア
本研究の目的は、日本の高齢社会において人々がどのように老い、看取り、死に向き合っているか、医療人類学的にアプローチすることである。具体的には、松本市のNPO法人ライフデザインセンターの「終活」と寺院活動を通して、老いや看取り、死をめぐり苦悩とケアのあり方を探る。また、北海道浦河赤十字病院の精神保健福祉の取り組みと訪問看護活動、そして社会福祉法人 浦河べてるの家 のピアサポート活動を通して、「病気をもちながら地域で暮らす」ための知恵と技法を探ることである。

(2) 国立民族学博物館共同研究との連携
本研究は、「サファリングとケアの人類学的研究」(代表：浮ヶ谷幸代)(代表：浮ヶ谷幸代)(2009年9月～2012年3月)と題した国立民族学博物館共同研究と連動している。共同研究では、「すべての人間に共通する生を構成する根源的なスタイル」としてのサファリングとケアの概念の人類学的再構築を試みることを目的とした。さらに、生老病死の現場と向き合う医療、福祉の専門家の苦悩を明らかにし、今後の医療のあり方に寄与する方策を探ることである。

3. 研究の方法

(1) フィールドワーク

研究方法は、参与観察とインタビューを中心としたフィールドワークである。

松本市では主に二ヶ所をフィールドワークした。一つはNPO法人ライフデザインセンターの活動として毎月開催されている勉強会に参加し、会員やスタッフの様子を参与観察するとともに、スタッフ5人にインタビューを行った。会員の声は見学会の際にでき

る限り拾った。もう一つは東昌寺の住職飯島恵道氏が主宰するイベントに参加し、その様子を参与観察した。また、前住職(2011年逝去)と古い付き合いのある信徒を紹介していただき、インタビューを行った。

浦河町では主に2ヶ所フィールドワークを行った。一つは、地域医療の可能性を探るために、浦河赤十字病院精神科の往診活動と訪問看護活動に参加し、「病気をもちながら地域で暮らす人」への専門家のかかわりのあり方を参与観察した。スタッフへのインタビューも行った。もう一つは、浦河べてるの家のピアサポート活動についてピアサポーターへのインタビューを行った。

(2) 国立民族学博物館共同研究との連携
(1)のフィールドワークと同時進行的に、民博共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」の下、計16回の研究会を開催した。なかでも、老い、死、看取りをテーマにした研究会を5回開催し、看護師、成年後見人、僧侶、葬儀業者という専門家との対話を行った。それ以外に、館外研究者を招聘し、意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) 老いと死に対する構え

かつて老いや死は人の自然なライフコースであり、成行きに任せる、あるいは地域の年長者の年の取り方、死にざまを見て、自分もそれに倣うという生き方が大多数であった。しかし、老いの意味や価値が多様化した今日、老い方や死の迎え方、死後の始末を自分自身でデザインするという「終活」が広まっている。松本市にあるNPO法人ライフデザインセンターでは、そうした声に応えるように、成年後見制度を軸に毎月勉強会を行っている。参加者は、多くが一人暮らし、あるいは子どものいない高齢者夫婦などであり、従来の老いと死の迎え方ができない人たちである。「自分らしく老いる」「自分らしい死の迎え方」を理想として掲げ、高齢者ホーム

の見学や自然葬や納骨堂などの見学を行い、一人一人の目的を達成できるように多くのオプションを提供している。しかし、こうした試みは、個人の望みをかなえる反面、選択の難しさを生みだし、他方で社会の個人化という状況をますます加速させることになる。看取り文化が日本から消えた今日、死を迎える場所として必ずしも自宅を選択しない人、もしくは選択できない人がいることがわかった。

(2) 地域で老い、看取るケアのあり方

北海道浦河町精神保健福祉活動は、精神科病院治療が当たり前の日本で、20年前からスタッフと当事者、地域住民を交えて「病気をもちながら地域で暮らす」ことに取り組んでいる。個人プレーの専門家のケアよりも、多職種連携によるケアが重視され、連携を主軸にした多くのミーティングを開催している。患者の全体的生を支えるために必要なケアのあり方を中心に専門家の活動を展開している。また、社会福祉法人 浦河べてるの家では、30年前から「当事者主体」掲げ、「病気をもちながら地域で暮らす」ことを目指してさまざまな活動に取り組んでいる。なかでも、当事者同士の助け合いであるピアサポート活動は、当事者が地域で暮らすためには不可欠のものである。ピアサポート活動ではフォーマルなものとインフォーマルなものをあえて区別せずに、当事者の全体的生を支えるために重要な役割を果たしている。専門家と非専門家を交えたケアするとケアされるというケアの互酬的關係など、在宅医療での多職種連携のあり方や在宅で死を迎える際に大きなヒントを与えてくれている。

(3) 国立民族学博物館共同研究との連携
民博共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」計13回の研究会を開催した。特に、老い、死、看取りをテーマにした研究会を5回開催し、かつ看護師、成年後見人、僧侶、葬儀業者という専門家との対話を行った。そ

の成果の一部を 2011 年度に中間報告書(『生老病死をめぐる現場に向き合う専門家との対話』)として刊行した。また、研究会全体の成果として、以下の論文集 2 冊を準備中である。A と B はほぼ同時期に刊行予定である。
A : 浮ヶ谷幸代編著『苦悩とケアの人類学』世界思想社(2014 年刊行予定)
B : 浮ヶ谷幸代編著『苦悩することの希望』協同医書出版社(2014 年刊行予定)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

浮ヶ谷幸代、人類学フィールドで ローカルな倫理が生まれるとき、社会学研究、査読有、93、2014 年、51 - 78 頁

浮ヶ谷幸代、《特集》界面に立つ専門家：医療専門家のサファリングの人類学「序」、文化人類学、査読有、第 77 巻 - 3 号、2013 年、382 - 392 頁

浮ヶ谷幸代、医療専門家のサファリングとその創造性：患者、利用者、依頼人との距離感という困難を越えて、文化人類学、査読有、第 77 巻 - 3 号、2013 年、393 - 413 頁

浮ヶ谷幸代、ケアと協働の構築；病者と専門家と人類学者と、文化人類学研究、査読有、第 13 巻、2012 年、32 - 54 頁

浮ヶ谷幸代、サファリングは創造性の源泉たりうるか？、民博通信、査読有、No.137、2012 年、14 - 15 頁

浮ヶ谷幸代、現代社会における「生きづらさ(苦悩)」の病いと生の技法：北海道 浦河べてるの家 の「当事者研究」と精神保健福祉の取り組み、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第 169 集、2011 年、55 - 82 頁

浮ヶ谷幸代、近代システムの専門分化が生み出すサファリングとケア、民博通信、査読有、No.134、2011 年、18 - 19 頁

浮ヶ谷幸代、調査が困難なフィールドで調査すること、福祉と社会 特集：福祉と医療

をめぐる現場学、査読無、第 6 号、2011 年、27 - 34 頁

浮ヶ谷幸代、ケアの場所性、相模女子大学紀要、査読無、第 74 号、2010 年、7 - 19 頁

浮ヶ谷幸代、医療と福祉の領域で人類学すること、文化看護学会誌、査読無、2010 年、第 2 号第 1 巻、48-58 頁

浮ヶ谷幸代、生老病死の現場に向き合う専門家との対話の地平、民博通信、査読有、No.131、24 - 25 頁

〔学会発表〕(計 9 件)

共同報告

浮ヶ谷幸代(代表)・渥美一弥、The Alternative Care: Activities of Café de Monk for the survivors of the Great East Earthquake and Tsunami、第 10 回アジア太平洋パストラルケア

カウンセリング学会(6th JSSC)合同学術大会、2013 年 9 月 14 日 - 16 日、東北大学

分科会「サファリングとケア、その創造性」

浮ヶ谷幸代(代表)、趣旨説明、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2012 年 6 月 8 日、慶應義塾大学

分科会「サファリングとケア、その創造性」

浮ヶ谷幸代、サファリングとケアの継承性、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2012 年 6 月 8 日、慶應義塾大学

共同報告

今村弥生(代表)・浮ヶ谷幸代・向谷地生良、Anti-Stigma Trial in Local Community in Japan: Social Action of Urakawa Bethel Home、第 6 回世界精神医学会アンチスティグマ分科会国際会議、2013 年 2 月 14 日、砂防会館

2012 年度東北社会学研究大会シンポジウム「社会科学と研究倫理」

浮ヶ谷幸代、報告 3 人類学フィールドで「ローカルな倫理」が生まれるとき、東北社会学

研究会、2012年10月6日、東北大学

分科会「界面に立つ専門家：専門家のサ
ファリングとケアの人類学」

浮ヶ谷幸代（代表） 趣旨説明、日本文化人
類学会第46回研究大会、2012年6月24日、
広島大学

シンポジウム「医療人類学はいかに貢献
できるか」

浮ヶ谷幸代、報告3「ケアと共同性の構築：
病者と医療者と人類学者と」、早稲田文化人
類学会第13回総会、2012年1月28日、早
稲田大学

招聘講演

浮ヶ谷幸代、医療人類学から学ぶ方法論、文
化看護学会第一回研究会、2010年9月、東
京医科歯科大学

浮ヶ谷幸代、ケアの場所性、日本文化人
類学会第44回研究大会、2010年6月、
立教大学

〔図書〕(計4件)

浮ヶ谷幸代編著、世界思想社、苦悩とケア
の人類学、2014年(刊行予定) 頁数未定

浮ヶ谷幸代編著、協同医書出版社、苦悩す
ることの希望、2014年(刊行予定) 頁数未
定

浮ヶ谷幸代編著、国立民族学博物館共同研
究中間報告書、生老病死をめぐる現場に向き
合う専門家との対話、2011年、全216頁

浮ヶ谷幸代、春風社、身体と境界の人類学、
2010年、全233頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浮ヶ谷 幸代 (UKIGAYA, Sachiyo)
相模女子大学人間社会学部・教授
研究者番号：40550835

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：